
謝 辞

松 森 晶 子

藤井洋子先生は、2001年に本学にご着任されてから、20年以上の長きにわたって英文学科で教鞭をとられてきました。

その間、学会では数多くの論文を公表なさり、それにより特に語用論や社会言語学の分野の発展に大きく貢献してられました。そればかりでなく先生は、社会言語科学会の理事、日本英語学会の評議員、日本言語学会の編集委員など、学会を支える数々の重要な仕事も引き受け、それらを粛々と、そして着実にこなしてられました。

それらの多岐にわたるご活躍はいずれも高く評価され、2020年には社会言語科学会においてもっとも優れた学術研究に贈られる「徳川宗賢賞」を受賞しています。

また先生はこれまで、国際的な活動にも積極的に取り組んでられました。特に国際語用論学会をはじめとする数々の国際会議においてその研究成果を次々と発表され、それらを通じ日本の言語研究の国際化のための牽引力となって働いてられました。

こうした藤井先生の国際的なお仕事は、西洋で発展した言語研究を単に「受容」するのではなく、独自の立場から「発信」しさらに発展させていこうとする研究姿勢に貫かれていたように思われます。その根底には、主に欧米で発展を遂げた語用論や社会言語学の理論的枠組みに対して、日本の研究者の側からの独自の見方や枠組みを提示し、それによって当該の分野を大きく進展させていこうとする真摯な研究態度がありました。こうした先生の数々のご業績は、国内の語用論や社会言語学のオリジナルな視点が

国際的に認知され、世界に広がっていくための、ひとつの重要な契機となったように思われます。

藤井先生は附属高等学校から英文学科に進まれ、本学の大学院に進学された後、1989年に放送大学に専任講師として赴任されるまで、学科の助手も4年間お務めになりました。このような経歴をお持ちの先生は母校である本学、とりわけ英文学科に対して特に深い愛情を抱いていらっしゃる様子でした。日頃から学科会議や教授会の席上で、一石を投じるような問題提起や、勇気ある発言を、臆せずに、堂々と、なさっていらっしゃる姿が印象に残っています。それらの先生のご発言には常に重みがありました。その重みはもちろん、母校の発展を心底から願う藤井先生の純粋な情熱が、その発言の一つ一つににじみ出ていたことによって生まれたものであることは間違いありません。

藤井先生は本学に赴任して以来、「英語学概論・構造」、「言語コミュニケーション演習」、「英語科教育法」といった言語学や英語教育関連の重要なクラスを担当され、それらを通じて多くの学生に多大な影響を与えてこられました。それらの授業を通じて言葉の研究の奥深さに触れ、言語学に開眼した学生たちも多かったと思います。「藤井先生の授業で、言語を研究することの面白さに初めて気づいた」という学生たちの声も数多く聞いています。

そのため藤井先生のゼミからはほぼ毎年のように、大学院に進学を希望する学生が輩出されました。また、そうして進学した大学院生たちの指導にも先生は決して手を抜かず、学生ひとりひとりの個性を生かせるよう、日頃から時間をかけて細やかな指導をなさっていました。そのおかげで後進が次々に育ち、現在、博士号をとって大学の英語教員として活躍中の者もいます。

このようにして藤井先生は、本学の言語学の分野の今後の発展にとって

欠かすことのできない大きな礎を築いてくださったと思います。

藤井先生、数々の功績を英文学科に残してくださり、心より感謝しております。私たちもこうした先生の情熱を引き継ぎ、未来へとつなげていかなければなりません。これからも、どうか英文学科を見守り続けてください。どうぞよろしくお願いいたします。
